

# 古ラテン語におけるLocal Relatorモデルと時間指示表現

著者	二本柳 譲治
雑誌名	東北大学言語学論集
号	4
ページ	149-156
発行年	1995-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129559">http://hdl.handle.net/10097/00129559</a>

## 古ラテン語における Local Relator モデルと時間指示表現

二本柳 譲 治

キーワード：古ラテン語，複合動詞，preverb, Local Relator, temporal relation

0. 初期の印欧諸語は、ラテン語も含めて、その統辞構造の特徴として、比較的単純で、ゆるく柔軟な構造を持っていたと考えられている (Friedrich 1987: 139)。このことは、構文法を動機づける要因として、近代ヨーロッパ諸語にみられるような固定化した統辞論の制約がはたす役割よりは、むしろ、意味論的な連関による連語構造の規制が優位であったことを示唆している。

構文法を特徴づける制約としての意味論的な動機づけが、通時的に統辞論優位の状態へと推移していく過程が最も顕著にあらわれる領域の一つとして、動詞接頭辞 (preverb, 以下 PREV) の付加による複合動詞の形成があげられる。複合動詞を形成する PREV は前置詞と同様に、元来、副詞的な小辞であり、その一次的な機能としては、事物の並存、あるいは空間的対置などの空間指示機能のみを有していたと考えられている (Kühner 1914, Bd. 1 : 488f, Wackernagel 1928: 210)。この空間指示機能を支える論理的な前提として、少なくとも2つの項 (argument, 以下 ARG) が要求され、その2つの ARG の結合が統辞論の上に投射される様式を分析する手段として、Local Relator (以下 LR) モデルが提唱されている (Lehmann 1983)。

このモデルは、LR としての PREV が持つ空間指示という「具体的」な意味機能を前提として、PREV に関して要求される2つの ARG と、動詞 simplex に関して構成される argument structure が、複合動詞形成のプロセスにおいていかなる変更を受け、それぞれの ARG がいかなる様式で構文中に具現化するかを示すことを目的としているので、構文法を支える言語構造の変化を考察するに際して、きわめて有効な手がかりを提供するものと期待される (拙論 1993)。

本論においては、Lehmann (1983) で提唱された LR モデルの枠組みにもとづいて、PREV の要求する2つの項が複合動詞の形成に際して構文中に具現化する様式を、Carvalho (1983) によって提示された修正意見を参照しつつ検討し、さらに、LR モデルによる、時間指示機能を持った PREV の取り扱いに関して、古ラテン語、特にプラウトゥスにみられる prae- による複合動詞の様相を考察する。

1. Lehmann (1983) において提示された LR モデルの基礎概念は次のようなものである：

- (1) *hic ego tibi praesidebo, ne interbitat questio* (Pl. Most. 1096)

前に＋座る-fut      無駄になる      尋問

「尋問が無駄にならないように、私はここであなたの前に座っていきましょう」

上の例文において、「y の前の x」という意味論的關係は、空間指示機能を持つ PREV として *prae-* が存在することによっている。このように、x が y に対して特定の「位置」をとることを、PREV などの LR が指定する際、

- (2) x : locatum (位置項)

y : relatum (関係項)

と呼ばれる 2 つの ARG が概念的に要求される。(1)においては、x は「私 (ego)」であり、y は「あなた (tibi)」である。この 2 つの ARG は次のように定義される (*op. cit.* 146f.)：

- (3) locatum は「その空間あるいは時間における位置が構文によって表現されるものである。これは ... 人、あるいは物であり、あるいは、できごとであってもよい」

- (4) relatum は「それによって locatum が位置づけられる項である。それは生物、無生物、あるいは、抽象概念であり、位置づけに関して point of reference として機能する名詞概念である。統辞論的には、LR が前置詞であれば、それは前置詞の目的補語であり、LR が PREV であれば、それは動詞の ARG の一つである可能性がある。通常は locatum となる ARG とは区別されるが、必ずしもそうである必要はない。relatum が潜在的であってもよい」

このように、意味論レベルでの機能に関する定義は具体的であるが、それが統辞論レベルで構文に投射される様式はかなり複雑なものとなる。locatum に関しては、基本的には、自動詞の主語、他動詞の目的語として具現化されるとしているが、この際、自動詞－他動詞の区別は複合動詞の base となる simplex に基づいていることに注意する必要がある。

2. LR の要求する 2 つの項のうち、relatum が構文中に具現化する様式、すなわち、relatum の統辞機能はかなり複雑である。以下 Lehmann の示した区分にしたがって検討す

る<sup>(1)</sup>。

2. 1. *relatum* が副詞句によって示される。
2. 1. 1. PREV とは異なった前置詞に導かれる句による場合。

- (5) *is (=Deus) me ad illam inlexit* (Pl. Aul.737)  
*locatum relatum* おびき寄せる  
「それ(神様)が私を彼女に対しておびき寄せた」

(5) は, *is laci me / ego in illam* と展開でき, *relatum* は前置詞 *ad* によって導かれている。このタイプは PREV と *relatum* を導入する前置詞が, 意味論の関係において類縁性を持っていることに支えられていると考えられている。

2. 1. 2. PREV と対応する前置詞に導かれる句による場合。

- (6) *de via decedite* (Pl. Amph. 984)  
*relatum* 離れる-impr  
「道から離れろ」

(6) は伝統的には二重用法 (duplication) と呼ばれているタイプであるが, (5) と同じ原理に支えられている。

2. 2. *relatum* が格形のみによって示される。

2. 2. 1. PREV と対応する前置詞に支配される格におかれる場合, 伝統的には, PREV が *rection* を持ち, *relatum* を支配する, という。ラテン語においては前置詞が支配する格は対格が奪格であるので, これには2つのサブタイプがある。

2. 2. 1. 1. *relatum* が奪格によって示される場合。

- (7) *Sceledre, manibus amisisti praedam* (Pl. Mil. 457)  
*voc relatum* 失う-pf 獲物  
「Sceledrus よ, 君は獲物を手から逃してしまった」

奪格を支配する前置詞に対応する PREV がこのタイプの構文をとる場合, それぞれの PREV による出現頻度は, *ab-*, *de-*, *ex-*, *pro-* > *in-* > *com-*, *sub-*, *super-* > *prae-* となり, *rection* の制約が規則的であろうと思われるのは *separative* としての奪格であり, *locative* の場合はかなり制限されている。これは通常, 奪格が用いられる場合の一般的な分布状況と対応しているが, このことから, このタイプの PREV が厳密な意味での奪格に対する *rection* を示し

ているかについては疑問がある，としている。

2. 2. 1. 2. *relatum* が対格によって示される場合。

- (8) *sagitta* Cupido *cor* meum transfixit (Pl. Pers. 27)  
 矢-abl=locatum 胸-acc=relatum つらぬく-pf  
 「Cupido が私の胸を矢でつらぬいた」

このタイプの複合動詞は，いわゆる affection 動詞である。その特徴としては，ほかのタイプにみられる *relatum* の具現化の様式とは異なって，*relatum* が直接目的語であられる。この構文はすべて次の定式にしたがう，とされる。すなわち：

- (9) *z* affects object *y* with object (instrument) *x*, and *x* LR *y*

つまり，*relatum* が直接目的語であられることにより，PREV の *locatum* は奪格（具格）であられることになる。(8)の例文は，*figo sagittam trans cor* と展開することができる。このような解釈は，対格を支配する PREV が複合動詞を形成するプロセスにおいて，他動詞 simplex が支配する対格がすでに存在する場合，それぞれの対格 ARG が同一構文中に具現化することによって二重対格構文があらわれることを回避するための制約として，argument structure の変更が行われることを想定している。

2. 2. 2. *relatum* が与格によって示される場合。

- (10) *bonum anteponam prandium pransoribus* (Pl. Men. 274)  
 前に置く-fut 食事 客-dat=relatum  
 「私は客に上等の食事が用意できそうだ」

与格は PREV による *relatum* の支配には関与しない。このことは，ante- (acc.) による複合動詞に関しても，prae- (abl.) による複合動詞に関しても，同じ頻度で与格による *relatum* が出現することで裏付けられる。

格形のみで *relatum* があらわれる場合，PREV と対応する前置詞が支配する格で表示されるのが最も自然であるが，それらの格は元来，具体的な意味機能を持った「具体格」であり，他の語類との共起に関しては制約を受ける可能性が大きい。それに対して与格は具体的な意味機能に関しては比較的プロトタイプ性が低く，より高い文法性を持った格である。このようなことから，*relatum* の文法化が進むにしたがって，与格の ARG が文構造において果たす役割が大きくなったと考えられ，実際，通時的にみた出現頻度もそのように推移している。

2. 3. *relatum* が潜在的である場合。

- (11) (tun redimes me, ) si me hostes *interceperint*? (Pl. Asin. 106)

買い戻す-fut                  敵    途中で取り押さえる

「もし敵が私を途中でとらえたら (私を買い戻してくれますか)」

(11) の *inter-* のように *PREV* が具体的な空間・時間指示の機能を持っている場合でも, *relatum* が構文中にあらわれない場合, それは文脈によって推測されなければならない。より正確に言えば, このような潜在的な *relatum* は *PREV* によって *deictic* に指定されるものである。この場合, *PREV* はより原初的な機能を伴ってあらわれているのであって, それは *rectional* な前置詞というよりは副詞的であることを示している。複合動詞を形成する *PREV* はこのタイプが最も多いことは歴史的発達過程から考えて当然のことであろう。

3. 上でみた *relatum* の具現化様式に関する分析の基礎となる概念として, Lehmann は *locatum* を「現実にとる具体的な位置 (の ARG)」と考える。これに対して, *Locatum* の定義をより定常的な, すなわち, 文法化の進んだ段階での機能としてとらえなおす考え方が Carvalho (1983) によって提案されている。

- (12) *eum* (=animus) [*deus*] *circumdedit*    *corpore*    (Cic. Tim. 20)

魂-acc                          つつむ-pf    肉体-abl

「(神は) 肉体でそれ (魂) をつつんだ」

Lehmann の考え方にしたがえば, *locatum* は *corpore* であり, *relatum* は *animus* となるであろう。なぜなら, *circumdedit* によって表現されるプロセスにおいて, 移動するのは *corpore* であるからである。すなわち, *corpus circum animus*。一方, Carvalho によれば, *locatum* はあくまでも目的語である *animus* であり, それが「ある種の様式でその空間に置かれている。その様式とは *circum* が示すものである。」すなわち, *animus circum corpore* であり, 「... に囲まれた *animus*」をとらえる。

この両者の解釈の違いは, 文構造を規定する要素として, 意味論レベルでの制約と統辞論レベルでのそのどちらがより優位に機能しているかについての解釈の違いに由来していると考えられる。逆に, どちらの解釈が, より有効に LR による複合動詞の統辞機能を分析できるか, その妥当性の程度が, 分析対象としている言語構造における統辞論の発達段階を判断する手がかりを提供すると考えられる。

4. Lehmann の提示した LR モデルは、もっぱら空間指示機能を持った PREV によって形成される複合動詞の argument structure の分析を対象としているが、時間指示 (temporal) の PREV の場合はどのような様相を示しているのであろうか。ここでは、プラウトゥスの作品中ににみられるデータを対象として、*prae-* による複合動詞の例に限って考察する。

LR としての *prae* は、その意味機能の特徴ゆえに空間指示用法から時間指示機能への転用が容易であったと考えられる。ところが、*prae* が有していたであろう時間指示用法は、歴史時代以前にすでに複合動詞の PREV にのみ限定されている<sup>(2)</sup>。一方、同様な意味範疇に属しているもう一つの LR である *ante* が存在することによって、何らかの機能分化が両者によって行われていたと予想される。

プラウトゥスの作品中には *prae-* を PREV とする複合動詞<sup>(3)</sup>の用例が約350例あるが、そのうち、時間指示機能を明瞭に示す用例は12～3例である。

- (13) *istam temperi gnato tuo sumus praemercati* (Pl. Epid. 407)

それ(=娘) 息子-dat 先に買う

「私たちはちょうどよい時に、あなたの息子より先にその娘を買った」

- (14) *ante lucem a portu me praemisisti domum* (Pl. Amph. 602)

光 港 locatum 先に送る

「日の出前にあなたは港から私を先に家に遣わせた」

- (15) *hoc praedico tibi : si Bona Fortuna veniat, ne intro miseris* (Pl. Aul. 99)

前もって言う 来る 中に 送る

「君にあらかじめ言うておく。Bona Fortuna が来ても中に入れてはいけない」

(13) は *relatum* が与格によって表示される例であり、*relatum* が構文中に明示されるのは、時間指示の *prae-* に関しては例外的である。(14) は PREV が空間指示・時間指示を同時に行っていると解釈されうる例であり、argument structure としては、空間指示の PREV の場合と同様に分析することができるとと思われる。(15) が一般的な PREV の振る舞いであって、*relatum* は潜在的である。

時間指示を行う PREV である *prae-* によって形成される複合動詞は、ほぼすべてが *relatum* を潜在化させている。このことは、先にみたように (2. 3.), PREV は第一義的には *relatum* に対して deictic であり、副詞的な機能をもって複合動詞の形成に関わっていることを示している。

5. 時間指示機能は、空間指示機能の転用によって生じたと考えられ、この転用のプロセスにおいて、一段階上位の抽象化が行われたと解釈することができる。空間における位置の認知は、時間における「位置」の認知より容易であり、また、その様式も現実に対応して多様であると考えられる。このようなことから、具体的意味機能に基づいて形成された構文法においては、空間指示の LR が関わる構文が、時間指示に比べて多様な発達を遂げたと考えられることができるかもしれない。

古ラテン語は、文語ラテン語が成立した初期の段階であり、ここでみられる統辞論の特徴が後の時代までそのままの性質を保って継承されたと考えることはできない。ラテン語の統辞論の様相を総合的にとらえるためには、やはり、通時的な考察が不可欠であり、各時代ごとに、あるいは、テキストの性質の違いごとにその特徴を検討する必要がある。その際、複数のコーパスを共通の基準で分析する手段として、LR モデルを用いることはきわめて有効であると思われる。

#### 注

- (1) 2. における例文はすべて Lehmann (1983) による。
- (2) オスク語には残存している (Leumann et al. 1977: 269)。
- (3) *prae-* 複合動詞は、それと対応するギリシア語の複合動詞の意味によって、その意味機能が明らかとなる場合が多い (*ibid.*, Wackernagel 1928: 166 ff.). このことは、プラウトゥスの作品において、ギリシア語がさまざまなレベルで影響を与えていることを示唆している。Fehling (1976, 1980) によれば、ある言語の統辞論は、その言語を使用する共同体の upper class の成員によって圧倒的な影響を受け、それによって大規模な構造変化を被る、とされる。プラウトゥスの言語は、少なくとも語彙レベルにおける (loan translation などの) ギリシア語の影響を無視することはできないことに留意する必要がある。

#### 使用テキスト

*T. Macci Plauti Comoediae*, 2vols. (ed. by Wallace Martin Lindsay, Oxford Classical Texts)  
*Plautus*, 5vols. (with an English Translation by Paul Nixon, Loeb Classical Library)

#### 参考文献

- Baldi, Philip. 1979. 'Typology and the Indo-European Prepositions,' *Indogermanische Forschungen* 84, pp. 49–61.
- Benett, Charles E. 1910–14. *Syntax of Early Latin*, 2vols. Boston: Allyn and Bacon. (Repr. 1982. Hildesheim. New York: Olms.)
- Cardona, G., N. H. Yide (eds.) 1987. *Festschrift für Henry Hoenigswald*. Tübingen: Narr.
- Carvalho, Paulo de. 1983. 'Réaction à la lecture de Chr. Lehmann' In Pinkster. (ed.) (1983), pp. 161–165.
- Coleman, Robert. (ed.) 1991a. *New Studies in Latin Linguistics*. Selected papers from the 4th International Colloquium on Latin Linguistics, Cambridge, April 1987. (Studies in Language



- Companion Series Volume 21) Amsterdam, Philadelphia : John Benjamins.
- , 1991b. 'Latin prepositional syntax in Indo-European perspective,' In Coleman. (ed.) (1991a), pp. 323–338.
- Ernout, Alfred, François Thomas. 1951. *Syntaxe latine*. Paris: Klincksieck. (6<sup>e</sup> tirage 1984.)
- Fehling, Detlev. 1976. 'Remarks on the Role of the Syntactical Calque in Standard Languages and the Similarity between Classical Greek and Latin Syntax,' *Folia Linguistica* 4, pp. 73–84.
- , 1980. 'The Origines of European Syntax,' *Folia Linguistica Historica* 1, pp. 353–387.
- Friedrich, Paul. 1987. 'The Proto-Indo-European adpreps (Spatio-temporal auxiliaries),' In Cardona, et al. (eds.) (1987), pp. 131–142.
- Kühner, Raphael. 1912–14. *Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache*, 3vols. (Rev. by Friedrich Holzweissig, Carl Stegmann, Andreas Thierfelder. 1966. Hannover: Hahn.)
- Kuryłowicz, Jerzy. 1964. *The Inflectional Categories of Indo-European*. Heidelberg: Carl Winter.
- Lehmann, Christian. 1983. 'Latin Preverbs and Cases,' in Harm Pinkster (ed.) 1983. pp. 145–161.
- Leumann, Manu, J. B. Hofmann & Anton Szantyr. 1965, 1977. *Lateinische Grammatik*, 2vols. München: C. H. Beck.
- Lindsay, Wallace Martin. 1907. *Syntax of Plautus*. Oxford: Parker. (Repr. 1988. Osnabrück: Otto Zeller.)
- Lodge, Gonzalez. 1924. *Lexicon Plautinum*. 2vols, Leipzig: Teubner. (Repr. 1971. Hildesheim, New York: Olms.)
- Meillet, Antoine, J. Vendryes. 1924. *Traité de grammaire comparée des langues classiques*. Paris: Champion. (5<sup>e</sup> Edition, 1979.)
- Pinkster, Harm. (ed.) 1983. *Latin Linguistics and Linguistic Theory*. Proceedings of the 1st International Colloquium on Latin Linguistics, Amsterdam, April 1981. (Studies in Language Companion Series Volume 12) Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Wackernagel, Jacob. 1926–28. *Vorlesungen über Syntax mit besonderer Berücksichtigung von Griechisch, Lateinisch und Deutsch*, 2vols. Basel: Birkhäuser. (Dritte Auflage 1981.)
- 二本柳譲治. 1993. 「ラテン語における複合動詞の統辞機能」『東北大学言語学論集』第2号, pp. 69–78.

(一関工業高等専門学校 講師)